

中国文化大革命期の服飾変遷

山内 智恵美

はじめに

悠久の服飾文化を持つ中国において、清末以前と以後では服飾の持つ意義が大きく変化する。清末以前においては、服飾の最も重要な意義は、着用者の身分や階級等を明確に示すことであり、特に上層階級においては、服飾が持つ多くの役割¹⁾の中でも文化的意義に重きがおかれたが、清末以後は、服飾制度に縛られることなく誰もが自由に服飾を選択できる時代へと変化した。しかし、これはあくまでも制度による縛りからの開放を意味するものであり、本当の意味での自由選択の到来にはさらに長い年月²⁾を必要とする。服飾研究は、各王朝が前王朝とは異なる服飾制を定めたこともあり、沈従文を筆頭に古代から清代以前の服飾研究が盛んであったが、21世紀に入り、劇的な変化を遂げた20世紀³⁾も研究対象に加えられることが多くなった。

本論は、「ファッションの砂漠」「七億総人民服」と揶揄された中華人民共和国に起きた文化大革命10年間の服飾文化の変遷を分析する。現在中国は、文化大革命収束からわずか40年しか時を経ていないのに、世界の工場、世界の市場から大国の一員へと変化し、リーマンショックで世界経済が低迷する中、いち早く内需拡大策をうちだし経済を回復し、市場主義原理を取り入れた経済的恩恵が、富裕層だけではなく豊かな中間層を築きつつある。この変化は服飾文化にも大きな変化をもたらした。わずか10年ぐらい前までは、中国ファッションの中心である上海においても、最先端の海外の流行ファッションは雑誌では紹介されても、店頭には並ぶにはさらに1年かかると言われた。しかし、現在の上海オフィス街では、時代の最先端に行くファッションに身を包んだ女性が闊歩する。上海のこのような状況は、世界の大都市の状況と一致するが、伝統服飾の存在という点において大きく異なる。

日本を例にとれば、日本の伝統衣装として誰もが知っている和服は、人生の重要な行事や晴れやかな場において着用され続け、さらに今日では、日本の伝統衣装としての和服の価値を見直し、日々の生活の中に取り入れようとする動きさえも存在する。しかし、上海の街を闊歩する漢民族の人々には、伝統の衣装を持ち合わせていない。伝統衣装が何であるかという議論とは別に、多くの漢民族の人々が自分たちの伝統衣装⁴⁾と考える「旗袍」や「唐服」「漢服」などのどれもが中華人民共和国成立後から次第にその位置を失い始め、文化大革命期に一掃される。もちろん文化大革命期に一掃された服飾は、伝統衣装だけではないが、文化大革命期に一掃された伝統衣装は、再びその位置を回復することはなかった。よって、本論では、文化大革命期の服飾の変遷の中でも特に伝統衣装の消滅の過程をこの時代の社会の変化と結び付けて明確にしたいと考える。またこの時代のイデオロギーと服飾がどのように結びついていたかを分析する。

1. スローガンに支えられ伝統的服飾の一掃

実際に文化大革命を体験した中国人の立場で考えると、文化大革命は悪夢という言葉以外では表現できないものであろう。また、文化大革命を体験していない中国人や我々外国人にとっては、どれだけ説明され、学術的にどれだけ解明されたとしても、その全てが何時までも謎の中にある。極端なこ

とを言えば、その実像を知れば知るほど、映画などのフィクションの世界で起きた出来事のような感じすらする。

文化大革命を振り返って考えて見ると、今でもそれはある日突然始まり、方向性もないまま、ただただでたらめに進行し、多くの現在においても拭い去ることができない害だけを残し、まったく何一つ、誰にとっても益の少ない結末を迎えた。歴史学者は、文化大革命が発生した原因に関して以下のようなコメントを残している。

無産階級文化大革命は、中国の未来を築く上において計画的に行われた試みであり、その目的は「人々の魂に触れる大革命」を実現することによって、中国人の性格を変えることであった。……教育、文学、芸術などのイデオロギー上の革命を通して、毛沢東の思想を受け入れ、中国人民が自ら進んで資産階級的思想の汚染への抵抗力を形成することである。……毛沢東の目標は、中国を貧困ではあるが、社会主義の純潔性を保持した社会、つまり、平均主義が行き届いた、特権の少ない、集団主義が行き届いた、官僚主義の少ない社会を築き上げることであった。(費・Macfarquhar 1990 : 315)

筆者は文化大革命を発動し、それに追随した人のほとんどが、自分自身の政治的権力を考慮し動いた、と考えるが、理想主義の幻想と衝動にかられて行動した人々が存在したことも否定できない。

毛沢東主席は文化大革命をデザインした人である。彼は一九六四年、フランスの文化部長との談話の中で「中国の過去の思想、文化や風俗をなくすべきである。現在はまだ存在していない思想、風俗、文化を発掘すべきである」、(Snow 1989 : 398) と述べている。毛沢東のこの考えは、文化大革命を発動した後「破四旧、立四新」のスローガンとしてその行動に表れることとなる。

一九六六年、文化大革命⁵⁾は毛沢東の指揮の下、終に発動される。文化大革命の主要な目標の一つが「文化」「革命」を推進することであるため、それはイデオロギーの革命であり、伝統的文化に対する革命であった。よって、伝統文化として受け継がれたものは、大方の物が悪と見なされた。その時の具体的なスローガンが「破四旧(旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を壊すこと)」であり、それは文化大革命の宣言書として、「十六条⁶⁾」の中で明確に宣言されている。

資産階級は既に打ち倒されたが、彼らが作り上げた搾取階級の旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣は群衆を腐蝕し、人心を征服し、再び支配の座につこうとしている⁷⁾。(金 1989 : 303)

無産階級文化大革命は人民の魂に触れる大革命である。数千年来、搾取階級が作り出した人民を毒する旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣の一切を徹底して取り除かなければならない。人民群衆の中に斬新な新思想、新文化、新風俗、新習慣を創造、形成しなければならない。これは、人類歴史史上空前の未だ嘗て無い、古いものを捨て、新しいものを打ち立て、風俗、習慣を一変させる大事業である。封建階級と資産階級から受け継いだ一切の遺産、風俗、習慣について、無産階級の世界観を用いて、透徹した批判を加えなければならない。(「高拳毛沢東思想偉大紅旗把無産階級進行到底」『解放軍報』1966.6.6)

プロレタリアートのイデオロギーが支配する中で、ブルジョアジーのイデオロギーと古い文化が否定された。これらを取り除き、同時に「四新（新思想、新文化、新風俗、新習慣）」を打ち立てるために、恐ろしい破壊行為が始められたのである。紅衛兵は暴力という手段を用いて、彼らが信じた「四旧」と思われる一切の物を探しては破壊し尽くした。

彼らは家財の没収、差し押さえを開始し、ありとあらゆる所で「資産階級の生活方式」と「四旧」を探し歩いた。街中で探し当てさえすればそのまま、没収、焼却、破壊、裁断などの破壊行為が始まり、一切の古いものは全て破壊されるべきものとして名を連ね、その結末がどうなるかは、運を天に任せるのみとなったのである。この現状を歴史学者は以下のように語っている。

紅衛兵は町を歩き回り、「資産階級」の文化的証拠を捜し歩いた。長髪の青年男女を見れば、街中の群衆の面前で坊主頭に剃りあげ、体にピッタリフィットしたズボンを切り裂いた……。一九六六年紅衛兵が「四旧」を破壊した間、各家庭の真珠や宝石などの装飾品、祖先から受け継いだ位牌や仏像を置く厨子、聖書、旧式の衣服、香水、古書及び代々その家に受け継がれた宝物は全て没収された⁸⁾。（費・Macfarquhar 1990：149, 723）

博物館や住宅は差し押さえられ、古書や芸術品は燃やされ、古い儒家の教科書からベートーベンのレコードまで全てのものが探し出され、ごみ箱に捨てられた。新たな革命の名称、毛主席の画像や語録が通りや建物に貼り出された。運の悪い市民が洋服や香港スタイルの髪型をしていたなら、攻撃と侮辱を受けた。（Snow 1989：426）

歴史学者たちの記述の他にも、文化大革命期を描いた小説の中で、同様の状況を読み取ることができ。ある小説には「革命群衆は憤怒し『悪人』達の高級な肌着や下着を切り刻み、洋服を含むすべての没収した品物をまとめて倉庫に放り込んだ。」（梁 1993：119, 143－5）「四旧」を破壊し、「反資産階級の生活方式」を推進している紅衛兵や一般大衆は、自分達が否定した服装に対して強い敵意を抱いた。甚だしい時にはその目は、孫中山の未亡人であり、中華人民共和国の副主席である宋慶齡にまで向けられた。「宋慶齡の髪型は、一九二十年代から変わることなく髷を結ったものであり、造反組織は彼女にさえも強制的に、髷を切らせようとした。この件は、周恩来総理の説得もあり、やっとのことで彼女は運良く難を逃れることができたのである。」（金 1989：303）

文化革命の高揚期には、すべての「四旧」と思われるものが破壊し尽くされた。既に過去のものとなった資産階級の生活方式に意を唱えるために、それまでに存在した様々な服飾は一掃されることとなる。紅衛兵と革命群衆は自分たちの勝手な立場や理論で、「四旧」に属すると見なした服飾を一掃していくのである。彼らの理論から「四旧」に属するとした服装は、洋服、革靴が資産階級、帝国主義を象徴するものであり、長袍、馬褂、斗篷、長衫は、封建主義、地主階級、反動官僚を象徴するものであり、旗袍は、封建主義、地主階級、搾取階級の生活パターンを象徴するものとした。各種スカートは、搾取階級又は、小資産階級を象徴するものであり、寝巻きも搾取階級を象徴するものであり、各種ジャケットは小資産階級を象徴するものとした。男性用の模様つきシャツも小資産階級を象徴するものであり、シルクのストッキングは、搾取階級、小資産階級を象徴するものとし、女性のお下げ髪は小資産階級を象徴するものであり、パーマをあてた女性の髪型、ショールなどの着用は、小資産階級を象

徴するものとみなされた。「飛機頭⁹⁾」や長髪などの男性の髪形は、小資産階級を象徴するもの、指輪、首飾り、イヤリング、ブレスレットなどの装飾品も小資産階級を象徴するもの、口紅、おしろい、黛、ヘアローション、香水などの化粧品と化粧は、搾取階級と小資産階級を象徴するものであるとしたのである。この他にも少しでも体の線にフィットした上着やズボンも排除の対象になったのである¹⁰⁾。

反対ムードの高揚と共に、文化大革命期には、中国式的伝統的な服飾はほとんど完璧に消滅した。言葉を換えれば、文化大革命は伝統の服飾の上に生じた一種の革命と言っても過言ではない。伝統の服飾に対する改革の芽は、十九世紀末に起こり、この時期から、伝統の服飾の社会全体における地位は、下降曲線をたどり続けた。しかし、二十世紀上半期までは、ある程度の地位は確保し続けたのだが、中華人民共和国が成立した後、伝統の服飾が占める地位は大きく後退し、文化大革命期に入り、伝統の服飾に残されていた僅かな場所も完全に消し去られることとなる。この時代に残された伝統の服飾と言えば、中国式的下着、中国式の綿入りズボン、年をとった農民がかぶる頭巾、中国式の布靴などわずかであった。これまでの伝統的な服飾に残されていたわずかな場所さえもほぼ完全に消し去ったという点から考えると、そして同時に伝統的服飾というものが無意味なものであるという観点から述べるのであれば、文化大革命は、過去数十年かかった大事業を僅か数年で成し遂げた偉大な革命であった、と言う事もできる。

伝統的服飾だけでなく、スーツに代表される西洋式の服飾もこの時期に一掃されたが、その後、スーツなどの西洋式服飾は、改革開放期になるとすぐにその地位を回復していったが、伝統的服飾は、文化大革命期にその姿を消し去られて後、二度と新たな流行として取り上げられることもなく、その地位は序々に縮小されていった。文化大革命は、漢民族の伝統的服飾¹¹⁾がその地位を消失していく過程を探る上で、鍵となる革命であり、尚且つ伝統的服飾の将来に渡る地位を決定する上でも大きな意義を持つ革命である。

2. 「紅衛服」の大流行と軍服熱の持続

毛沢東自らが発動した文化大革命が、林彪と林彪の指揮した解放軍に依存していたため、毛沢東は全ての中国人民が中国人民解放軍に学ぶことを呼びかけた。その結果、解放軍は人民の崇拜の対象となったのである。文化大革命の発動機のみだけでなくこのような状態が見られたのではなく、文化大革命がその結末を迎えるまで解放軍の地位は高いままであった。よって、多くの人が解放軍に参加したいと考え、年頃のお嬢さんやその両親は、解放軍に籍をおく人との結婚を強く望んだ。「紅衛兵」は紅色の衛兵を意味しており、解放軍を手本にして作られたものである。自分達の思想に熱くなった学生達は、紅衛兵を解放軍の予備軍にしようと考え、自分達自身を自ら、軍隊に属さない解放軍兵士—毛沢東の衛兵—と見なした¹²⁾。

積極的なグループによって、解放軍に対して空前の崇拜ブームが巻き起こり、毛沢東に対しての忠誠を彼らは心から誓った。文化大革命に参加した積極的なグループは、そのほとんどが若い学生であり、革命を象徴する服装—解放軍の軍服、軍帽、赤い腕章、牛革ベルト、胸に毛沢東の肖像入りのバッチがつけられた。人々は彼らの服装を「紅衛服」と呼んだ。彼らに先導される形で、一般の人々も多くの人が「紅衛服」を着用した。造反の最中、没収捜査中、毛沢東の観閲時も、紅衛兵はこれらの帽章と襟章のない軍服—「紅衛服」—を着用したのである。

しかし、軍服は制服であり、誰もが自らの意志によって自由には買えるものではない。よって、大部分の紅衛服は、軍服を手本に模倣して作られたものであった。つまり、黄緑色の布地を使い軍服を真似て作った一種の制服であった。この時期、本物の軍服（模倣して作った軍服でない）を所有しており、その軍服を着用すれば、ある種、特殊な栄誉も手に入れ、嫉妬と羨望の眼差しをその身に感じるようになったのである。実際、本当に限られた人々だけが、この幸運と権利を手に入れることができた。その他大勢の人々からすると、本当の軍服は、今のシャネルのファッションよりも、ずっとずっと価値のあるものであった。あの全くファッションが存在しない時代において、軍服は唯一誰からも認められたファッションであった。この極端な革命化が作り出した軍服熱は、ほぼ十年間続いた。七十年代後期になって、軍服はだんだん時代遅れになり、一般の人々の日常生活では、その姿を見ることはなくなった。

3. ファッションに回復の兆しと、一律化傾向

文化大革命期に見られた極端な極左の状態は、わずか二、三年で終わりを告げる。七十年代初め、人々の間で文化大革命熱が冷めるに随って、極左勢力は弱まり、極端な極左的状况からは僅かに回復する。

その状況は、まず紅衛服に変化が見られたことである。黄緑色が減り、青や灰色が増え始める。スタイルは、依然としてほとんど変化は見られなかったが、ポケットの形や位置などにほんの僅かな変化が見られた。人々は、これらの青や灰色の布地で作られた服装を「人民服」「解放服」と呼んだ。同時に、中山服もこの時期には着用されるようになっていくが、遠くから見れば、ほとんど見分けがつかなかった。

第二に文化革命以来、それまで良くないと見なされていた服飾が、人々の間で僅かに回復したことである。例えば、若い男性は、地味なジャケットを着用し、若い女性は、形が単純で色が地味なスカートやシャツを着用するようになり、中国式の女性用の上着も、嘗てとは異なるニュアンスで捉えられるようになった。上海や天津などの大都市では、新たなデザインが出始め、上海では裾を絞って体にフィットさせたズボンが流行した。

第三は中国式の服装が僅かではあるがその地位を回復した。主に女性の服装においてであるが、春、秋、冬には、模様や色布¹³⁾を使用した中国式の前ボタンで合せ襟の上着が流行した。

以上のような若干の変化は見られたが、根本的にはこの時代の服飾はほとんど完全に統一されていた。当時、中国を訪れた外国人は、皆この光景を不思議に感じ、「中国人は誰もがほとんど同じ服装をしていて、髪型も同じように短くしている。外見からでは人々の性格、年齢、職業、地位を見分けることは無理で、ただ一種類の服装—落ち着いた色の軍服—だけが中国で許された服装であるかのようだ。」と一様に述べている。全体を見れば、七十年代には多少の変化が見られたが、この時期でも、中国の中で統治的地位にいる人々は、極左的傾向が強く、極端に革命的な傾向を帯びていた。見た目の良い、手の込んだ、斬新な服飾は依然として「不健康な資産階級の生活方式」と結び付けられる可能性が強かった。よって、文化大革命の後期にさしかかっても、消極的集団は危険を冒してまでモダンな、人々の目を引く服装や、見た目にも綺麗な髪形に挑戦することを避けたのである。実際この時期、世間の人々は、その人の身に着けているものを観察して誰が無頼漢か、誰が良くない思想を抱いているかを判断したようである。つまり、服飾が記号としての価値を最も強くもった時期である。これは、文化大革命が生み出した非常に珍しい極端な現象である。後になって、多くの人々が自ら反省

を口にして、文化大革命は美を追及する感覚を墮落させたと思われ、一種ばかげた禁欲主義の時代であったと指摘している¹⁴⁾。

4. 「国服」製造の失敗

「国服」とは、国を代表する衣装という意味である。国旗、国歌を考えれば用意に想像でき、それは民族衣装でも伝統衣装でもない。一九七五年頃、天津は中国政府の手によって、服飾試験都市に指定された。推進役は毛沢東の夫人江青である。彼女自身も当時の社会の服装に性差がまるでない、単調すぎて「何かが足りない」「お粗末だ」と感じていたようである。彼女は、デザイナーにあるワンピースをデザインすることを命じた。このイデオロギーがすべてを支配する時代において、旗袍や西洋風のワンピースを連想させることを避けるために、彼女が命じたこの新しいワンピースは民族の伝統を大いに発揚することに焦点をあてたようである。そして、宋代の服飾をベースに考え出された。江青は第二の孫中山の中山服¹⁵⁾を目指し、中国に新しい服装を作り出すだけでは物足りなくて、その服装を「国服」にすることを考えていたのかもしれない。彼女は中央政府の政治権力を使い、このワンピースを普及させようとして、「強制的に北京、天津、上海などの大都市に半ば送り届けるような形で、割り当て制を用いて強制的に売りさばいた」。(黄能馥 1995: 387) 人々はこのワンピースを「江青裙」と名づけた。しかし、服飾文化に限らず文化や伝統習慣は、単純な政治的思惑でコントロールできるものではなかった。強制的に推し進められた結果は、この中国風でもなく、西洋風でもない服装は受け入れられず、好まれることもなく、適応もされず、奇妙な服装であると感じられただけであった。間もなく彼女の試みは失敗に終わる。

彼女のこの試みは失敗に終わったものの、人々は中山服が作り出されたとき同様、「民族衣装」が存在しない局面を開きようとして、「国服」を作り出そうとした場面を直接見るようになったのである。

中山服は中華民国時代に官服としての地位を確保し、中華人民共和国が成立した後、他の男性の衣装であるスーツ、長袍馬褂が衰退するにつれて、次第に着用されるようになる。そして、文革時期になると中山服は男性にとって唯一の正式な服装となるのである。歴史に残る毛沢東の多数の写真から、毛沢東は正式な場所では、中山服だけを着用していたようである。よって外国人は、中山服のことを「毛式服装」と呼んだ。また、周恩来もごく稀にスーツを着用しているが、多くは中山服を着用している。この後 80 年代に入ると正式な場面では男性は、スーツか中山服を着用し、中山服が着用されることはごく稀な事になっていくが、鄧小平は以前と中山服だけを着用したし、政治家たちは、民族を強調する場面では、スーツでなく中山服を着用したのである。こうして、中山服は漢民族にとって「民族衣装」というに値する地位を獲得していくが、「江青裙」は今日その影すらみることができない。

おわりに

文化大革命が終わりを告げるまでの時期は、服飾自体が容易に外部より識別し判断できるため、社会的意義・政治的意義・国家的意義を強く表す記号として位置付けられ、どの時代よりも、イデオロギーの影響を強く受け変化したことがわかる。

本来服飾文化は、様々な要因の影響を受け、ゆっくりとした変化を見せるのが普通であるが、この時期の服飾は、予想に反して劇的な変化をみせている。つまり、劇的な変化の陰には、特殊な事情、

イデオロギーが大きく関わっていたことが理解できる。アフガニスタンなどのイスラム諸国に見られる女性の「ブルカ」着用も、政治上の特殊な事情が働いて、急速に普及したものであり、この状態と建国から文革、特に文革期の中国の状態は非常に類似している。

この時代の人々は、まず、「文化」の「革命」の名のもとに、伝統的文化に対する革命を推進し、旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を壊すことが革命だと信じた紅衛兵の指揮のもと、彼らのまったく勝手な理論で資産階級の或いは帝国主義の服飾だと信じたものを一掃していく。伝統的服飾も当然一掃すべき服飾とみなされ、わずか数年の間に街中から完全に姿を消すことになる。

一方、革命を象徴する服装として解放軍の軍服が人々から崇拜されるが、軍服は誰もが着用できるものではないため、軍服を真似、胸に毛沢東の肖像入りのバッチで統一した「紅衛服」が広く人々の間で着用されるようになる。この老若男女にまったく差のない衣装が中国全土を席卷することになる。

その後文化大革命の極左的傾向が緩むにつれ、服装の中に些か変化がみられるようになる。そのもっとも大きい変化は、紅衛服に変化が見られたことである。変化が見られた服装は、人民服、解放服と呼ばれ人々に着用され、中山服もこの時期には人々の間で着用されるようになっていく。これと同時に新しい服装を作ろうとする動きや、若い女性の間で伝統的な上着が色柄物を使って作られたりしたが、消極的なグループは、わざわざ身の危険を冒してまで衣装に挑戦することはなかった。

つまり、建国から文革に至った時期は、二十世紀全体と比較しても、政治とイデオロギーが服飾文化に与えた影響が、高潮に達した時期であり、その影響は今も続いている。そして、この強い影響は、文革期、漢民族の伝統的服飾を、彼らの日常生活より排除し、筆筒の中からもその姿を消し去ったのである。文化大革命が終わりを告げ、改革開放期を迎えても、漢民族の伝統的服飾は変化し続けており、変化する要因の中には、他民族に見られない特殊な要素が隠されている。この要因を一つ一つ明らかにしていくことが、漢民族への理解を深める上で、非常に重要な作業であると考えられる。この点を明らかにすることは今後の課題となる。

注

- 1) 服飾の持つ役割は、自然発生的役割と文化的役割に大別される。自然発生的役割とは、身体を保護するために生まれた役割であり、気候の変化や日差し、雨、風、虫などから体を保護する役割である。文化的役割とは、着用者の身分や地位、職業、性別、年齢、個性などを表すための役割がある。服飾学の碩学たちは、服飾の持つ役割について、各自の理論を展開している。詳しくは、李当岐（1990：40）、呉澤霖（1920：93－4）などを参照されたい。
- 2) 清末以降の服飾文化の変化は、5段階に大別される。つまり、清代の服飾制が崩壊に向かう清末期、租界を通してもたらされる西欧文化と伝統文化が両立し、国際関係の中で文化自体が多様化した中華民国期、多くの伝統文化が淘汰され画一化された建国から文化大革命期、国際化と復古の流れが交差する改革開放期、国際化の流れの中を歩む現代である。
- 3) 20世紀の服飾研究は、歴代王朝別の研究の最終章に取り上げられることが最も多い。またここ数年服飾研究が細分化される傾向があり、下着、装飾品、袍服などに細分化され20世紀の服飾についても研究され始めている。20世紀そのものに焦点をあてた研究としては成平他ほか編（2002）、袁仄・胡月編（2010）があり、チャイナドレスに焦点をあてたものとして、謝（2004）などがある。

- 4) 伝統服飾とは何か、特に漢民族の伝統服飾とは何かという問題については、山内（2000）「漢民族の服飾変遷に関する一考察」を参照されたい。
- 5) 文化大革命がどのようなものであったかを記した文献を見ると「文化大革命の主要な特徴は、社会主義の条件の基、執政党である中国共産党の領袖—毛沢東—が自ら発動し指揮したことにある。併せて党の中央委員会が一万人に及ぶ群集の参加を正式に呼びかける事を決定した点である。『無産階級専制下継続革命』という極端な『左』より理論の指揮下において、『反修防修』『保証紅色江山不改變顔色』の莊嚴なスローガンで人民に結集を呼びかけ、『党内走資本主義道路当權派』を運動の中心に据え、『一個階級推翻一個階級』を具体的目標に、全面的に権利を奪い取る政治的大革命を推進することが主要な意義とする政治運動を持ってし、自由に発言し、大いに意見を述べる壁新聞、大弁論、革命経験大交流などの方法を使って、大民主主義を押し進めた。まず文化界にメスが入り、少しずつその他の各界に広がり、全国規模の全面的な群集運動へ拡大していった。」（金 1989：81）
- 6) 「十六条」とは、一九六六年八月に開かれた「八届十一中全会」において決められた「関与文化大革命的決定」であり、「十六条」の略称で広く知られている。
- 7) 十六条の公布前、一九六六年六月一日、「人民日報」は陳伯達の社論「横掃一切牛鬼蛇神」を發表した。社論は所謂「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」を徹底して排除することを呼びかけた。
- 8) 北京大学では、一九六六年六月から八月中旬までの間に、全校内で捜査を受けた者は536戸に及び、50%の北京大学教授、80%に及ぶ学校関係者と学部幹部の家庭が捜査を受けた。（金 1989：226）
- 9) 流行の髪形の一つで、髪の前方の部分を飛行機の機体のように突出させたことからこの名がついた。
- 10) 例えば、据蕭乾『文革雜憶』によると、「ある老婦人が自分の娘にワンピースを作るのに、伝統衣装の一つである当て布の「褂子」を使おうとしたが、娘さんは死んでもいやだと抵抗した。さらに婦人に向かって、大声で「貴方ときたら、私の足を引っ張るつもり！自分の娘が修正主義集団とみなされてもいいの」と叫んだと記載してある。（据 1996）
- 11) 近年愛国主義運動の高揚と世界における中国の地位の向上が相伴って、中国大陸内で復古ブームが巻き起こっている。この傾向に伴い服飾界でも、伝統の服飾が最新のファッションとしてもてはやされる状況が生まれている。流行の伝統スタイル化に関して、筆者は、復古ブームだけに由来する単純なものではなく、「民族衣装」の欠落感、民族意識などが複雑に絡んだ結果として捉えている。この問題については、後日紙幅をさきたい。
- 12) 紅衛兵とは、文化大革命期、大学生や中、高校生などの学生によって自発的に作られた組織の一つである。その意味する所は「毛沢東の紅色の衛兵である。……一九六六年五月二十九日晚、清華大学付屬中、高の十数人の学生が学校近くの圓明園の旧跡に集まり、旧ソ連の衛國戦争時期の『青年近衛兵』組織のように組織化することを決定した。大多数の意見に基づき、組織名を『紅衛兵』とすることに決定した。自分達の行動を持って、『保衛党中央』『保衛毛沢東』を掲げた。」（金 1989：207－9）
- 13) 袁・胡によると、若い女性が用いた花柄模様の中に「文革時期は、『紅太陽』『天安門』『長征』などの政治的図柄を模様の中に入れ込まなければならなかった」としており、作者が所蔵する当

時の布が画像で紹介されている。(袁・胡 2010: 357)

- 14) 今名前は思い出せないが、筆者が以前見た中国の映画は、この種の極端な禁欲主義を批判していた内容であった。ある美しいお嬢さんは、綺麗な衣服や化粧を好み、ある日流行の服装を身に着けていたため、役所を辞めさせられてしまった。彼女は終に新しい仕事を探せず、自殺するより他に方法がなかった。この映画の内容は誇張されすぎていて、全ての内容は信じがたいが、見る者に反省を促していた。
- 15) 中山服とは言うまでもなく、孫文がデザインした男性用の上着の一種である。デザインの原型が何処にあるかという問題は、日本の学生服であるという説、日本のボーイスカウトであるという説、広東地方の普段着にあるという説など諸説あるが、まだ結論を得ていない。特筆すべきは、現在でも東南アジアのマレーシアやインドネシアなどの地域では、中山服の初期の原型が見られる。後に中山服は、特に中華民国時代においては、国民党政府の官服として定着した。中山服の原型の詳細は、周 (1984)、黄士龍 (1994, 2006)、黄能馥 (1995, 2007) を参照されたい。

文献

- 李当岐, 1990, 『服飾学概論』, 北京, 北京高等教育出版社。
- 呉澤霖, 1920, 「服飾的研究」, 『東方雜誌』 17(13), 89-99。
- 成平・陳惠芬・李子云編, 2002, 『百年中国女性形象』, 珠海, 珠海出版社。
- 袁仄・胡月編, 2010, 『20世紀中国服装流变』, 北京, 三聯書店。
- 謝黎, 2004, 『チャイナドレスをまとう女たち—旗袍にみる中国の近現代』, 東京, 青弓社。
- 山内智恵美, 2000, 「漢民族の服飾変遷に関する一考察」, 『北海道文教大学論集』, No.1, 77-89
- 費正清・Macfarquhar R. 編, 1990, 『劍橋中華人民共和国史』, 北京, 中国社会科学出版社。
- Snow.E, 1989, 『毛沢東的中国及後毛沢東的中国』, 成都, 四川人民出版社。
- 金春明, 1989, 『「文革」時期怪事怪語』, 求实出版社。
- 梁曉声, 1993, 『一個紅衛兵的自白』, 西安, 陝西人民出版社。
- 据蕭乾, 1996, 『文革雜憶』, 西安, 太白文芸出版社。
- 周汎編, 1984, 『中国歴代服飾』, 上海, 学林出版社。
- 黄士龍編, 1994, 『中国服飾史略』, 上海, 上海文化出版社。
- , 2006, 『中国服飾通史』, 北京, 中国紡績出版社。
- 黄能馥編, 1995, 『中国服装史』, 北京, 中国旅游出版社。
- , 2007, 『中国服飾史略』, 上海, 上海文化出版社。

The Uniforms in the Cultural Revolution

YAMAUCHI Chiemi

Abstract : People who are not familiar with the Cultural Revolution, declared by Mao Ze Dong, cannot readily understand this period when the Chinese people lost everything, having had to give up old customs and their traditional culture. Mao was a great statesman, but after the power struggle during the Cultural Revolution, he made the worst choices for his people. As a result, the Chinese people were forced to take a new turn, doing away with gorgeous clothes and extravagances from the social system. As a result, the standard dress became the Ren min Zhuang, the uniform that looked like a military uniform and was worn by men, women and children. It was ubiquitous at the height of the Cultural Revolution. In this paper I described the process of this uniform becoming the standard dress in China, and how, after ten years of the revolution, a shift in the political stance also led to a change in the uniform as well.